

▲路傍の祠

岩代須賀川町 服部 貞子

隣り村への通ひ路を、枝垂れ小柳に招かれて、小さく
低き祠の前にたゞみぬ。

半ば朽ちたる階段を、かしくみて昇れば、み廊下のあ
たり、誰が捧げしか米の幾粒、小雀の拾ふにまかせつ。

その雀は我が足音に驚きて飛び去りぬ。傾きし狐格子
には、軍さ人の妻が夫の無事を祈りての髪の毛が、生
ぬるき風にゆらめく。扉のうちをうちのぞけば、あな
尊や、闇の中よりみ劍の光り目を射りぬ。獻燈、繪額
なども數多かゞげられて。

祠を繞れる、清き流れに、姿を寫して、右手なる巖の
上より生ひ茂れる老椿の、紅の大輪一つポタリと落ち
て、流れに委せつ。彼方に、此方に、かくて祠を一繞り
しぬ。目を病みし人此流れの水もて目を洗はゞ忽ちに
して醫ゆと云ふ。思へば此祠！

春は草刈る乙女の利鎌を磨きの場所に。

夏、旅人の汗とつかれを一掬の水に蘇生らせ。

秋、茸狩りの里の少女に、その數の多からんことを希
はれ。

冬は冬とて行き暮れし獵人のかりの宿りに。

かくて幾年や過ぎ來しけん、不動明王の扁額古りて。

何蟲か黄色き繭を、一つかけたり。

【入力者注】原文には、傍点などが付されています

が、煩雑を避けるために除きました。

初出・底本：「中學文林」明治三十九(1906)年

第貳卷第四號

テキスト入力：小林 徹

公開：令和五(2023)年一月三日

更新：令和五(2023)年一月五日

リンク：[水野仙子](#) [作品年譜](#)

謝辞：底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様に

厚く御礼申し上げます。